

【比較的普通な世界観シリーズ】

えちえち陽炎く汗だく地獄く

▼元作品リンク

本作品の著者様／ふでなり筆鳴先生

書かれたVの子／かげろう陽炎ツバキさん

「今日もVのドスケベ ファンアート FA リストでオカズを探すか」

一人暮らしのサラリーマンはパソコンの前で独奏会ソロの準備を始めた。

「ランダム表示の1番目は……かげろう陽炎ツバキか。どんなキャラだろ」

ドスケベ ファンアート FA リストでそのキャラの詳細をクリックすると、

立ち絵画像とキャラ属性が表示された。

「シコリティに申し分ないけど、今日は巨乳の気分なのでパス」

戻るボタンをクリックしたがパソコンが応答しない。フリーズだろうか？

「ええい、おうじょうぢわ往生際が悪いぞ、ロリババア妖怪め！」

貧乳の気分の時に抜いてあげるから、パソコンを呪うのはやめなさい」

うだうだしている間に指揮棒タクトが温まってしまふ。なんたることか！

一向にフリーズから復帰しないのでパソコン本体のリセットボタンを押すために、ゲーミングチェアを回転させて腕を伸ばした。

「随分な言いがかりじゃのう？ フリーズの原因はパソコンの冷却が追い付いていないせいじゃろう」

独身貴族サンクチュアリーの自宅かげろうに陽炎ツバキけんげんが顕現けんげんしている。
最近フイチューバーのVTubeの技術力には驚くばかりだ。

「え？　なんでいるんですか？」

エルフ耳ふとまゆ前髪ぱつつんロングヘアのロリ貧乳妖怪に出た言葉はこれ。

「妾わらわは精をエネルギーにしておるゆえ、チリ紙に捨てるぐらいならいたただきに……
かの？　もしくはスケベの創作意欲が弱まった故のリフレッシュ行為でもよいぞ」

八重歯やえばを覗かせる口からは本気なのかふざけているのか分からない答えが出る。

「……………」

サラリーマンはフリーズしている。

なんと反応すればいいのかベストアンサーに迷う。

「ちなみに妾は一度でもシコられておらねば顕現できぬ身でな。汝の守備範囲外とは言わせぬぞ。パソコンが冷えるまで股間の放熱に勤しむがよい」

勝手にエアコンのボタンを押すとサラリーマンのアイスバーをしゃぶりはじめた。

「んっ……あむ……ふっといのお……♡」

歯が当たらないように陽炎ツバキはねちっこくフェラを続けている。

揺れる頭を眺めていればアイシヤドウや髪飾りの椿に上品さを感じなくもない。

「気持ちい部分があれば、言うんじゃないぞ？　じゆる……じゅぞぞ♡」

下品に音を立てて吸い付きしゃぶる姿は妖しい女そのものだった。

「くっ……貧乳の気分じゃないのに、身体が熱く……っ！」

パソコンさえ健在なら机の下でしゃぶらせて、

巨乳キャラでフィナーレできるのにとサラリーマンは一瞬悔しかった。

「ふう♡ 妾もなんだか身体が火照りおる……れろ……んぶ♡」
汗をかき始めたためかインナーが肌に張り付いている。

（あ、身体が熱いのは陽炎ツバキのせいじゃねえわ……。）

家の主であるサラリーマンは何か気づいた。

そして、緊張と興奮がちよっぴり和らぐと股間のタケノコも呼応する。

「んっ？ 妾の口撃が足らん……とでも？ こやつめ……っ」

悪態あくたいをつきながらも陽炎かげろうツバキは焦っていた。身体からだの火照りが足を引っ張って舌の動きに影響が出たのかもしれない。

こうなってしまうては、新たな燃料投下は必須だ。

「んぶっ……こっちを向け……」

上着を床に落とすと部屋の姿見にお尻を向けるように椅子を動かす。しゃがんだ状態から膝を伸ばして、おちんぽに礼を捧げる体位になる。

「だから今日は貧乳の気分じゃ——」

サラリーマンはその姿勢だと口元が隠れてしまい逆効果だと思った矢先、鏡に映る陽炎かげろうツバキのケツと太ももに不意打ちを喰らう。

「じゅぼ♡　じゅるる……ぐっぽ♡」

身体全体を使って肉棒にくぼうへ快楽を注ぎ込む。

サラリーマンとの会話は無視してトドメを刺しにゆく。

「う……うお……持ち味を活かすとは……見事だっ」

サラリーマンのイチモツは再び硬度を取り戻し、砲撃ほうげきに向けてチャージを始めた。

「んぶ♡　……いつでも……イってよいぞ♡　じゅるる♡♡」

口の中で亀頭きとうを舌で小刻みに弾きながら、

片手でパンツをロリケツに食い込ませて尻を揺すって魅みせつけた！

「ああ……！　ロリババアのフェラが気持ちよくて……出るっっ」

サラリーマンはイってしまった。貧乳の気分ではないと豪語ごうごしたのに射精した。自分よりも一回りも小さい女相手にザーメンを漏らしてしまったのである。

「~~~~♡」

陽炎かげろうツバキは射精を優しく受け止めて、口から漏れないように唇をすぼめた。サービスと言わんばかりに食い込ませたパンツを右へ左へと引っ張った。チラ見えする花卉もオカズにして全部出せと男の下半身に命じる。

「はあ……はあ……あ、ありがとうございます……」

サラリーマンは意地を張らずに素直に感謝を述べた。決して悔しくはない。

「……っは♡ 汝の子種こだねじり汁、濃厚じゃな♡」

ごっくん……と喉を鳴らしてから陽炎かげろうツバキはザーメンの感想を伝えた。全身運動を組み合わせたフェラのせいで汗だくになっている。

「ベッドをしばし独占させてもらうぞい。汗水たらして働いたからの」

勝手にサラリーマンのベッドにダイヴして汗をシーツに吸わせる。

そして胸元のインナーを引っ張って内側に空気を入れて冷やす仕草をする。

「こんなに身体が熱くさせた責任……取ってもらうからな……」

サラリーマンはゆらりと立ち上がってエアコンのリモコンを握りしめている。

「くっくっくっ……妻の身体に欲情して何を偉そうに——」

「違う。あの時かっこつけてボタン押してたから確認しなかっただろ。

これ、暖房、Now」

「あ……あああああ~~~~~!?!」

陽炎ツバキは恥ずかしさのあまり悶絶した。

「これじゃ、パソコンも身体も冷えねえじゃねか！ ドジっ娘も目指してんの？」
サラリーマンはちんちんをイライラさせながらベッドに迫る。

そして陽炎ツバキのパンツを剥ぎ取った。

「違うのじゃ！ か、かっこつけてなどしておらぬ、偶然の事故じゃ！ ちよ、
妾の下着を獲るなあ!!」

陽炎ツバキは汗と愛液でぐつちより濡れたパンツを見られてしまった。

「オラ！ クーラーがちゃんと効くまでハメ倒してやるからなっ！」

正義の怒りとムラムラパワーを身に纏ったサラリーマンは妖怪ババアをワカさせた。

「おっ♡ や、やめぬかつ♡ 悶もだえてる途中に種たねづ付けプレスやめるのじゃっ……!!
イグっ♡ 情緒じょうちよぐちゃぐちゃの状態じょうたいでイグっ♡」

秒びようでサラリーマン組み伏せられて肉棒にくぼうでおまんこの愛液あいりやくを掻かき出されてしまう。
口淫こういんで興奮こうふんしていたのも相まって、絶頂ぜつちようへのハードルはめちゃくちや低い。

「腹空はらすいてるんだろ!? 遠慮えんりよすんな、たっぷり受け取れっ!」

どちゅ♡ どちゅ♡ ……と、ピストンを数分繰り返し二度目の射精せいじに至る。
絶頂けいれん痙攣けいれんしているおまんこに新鮮なザーメンザーめんを中出しする。

「ひゅ♡ 中に……わ、妻つまの中に……直接出てる……お♡ お♡」

中出しの感触かんじくと連動れんどうするように深イキふかしてオホ声おほこゑを上げてしまう。
手足てあしをピクピク震ふるわせてはしたない顔を晒さらして快樂さくらくの波なみに吞のまれてしまった。

「射精せいじの時に締め付けのタイミングが遅い! やりなおし!」

興奮状態のサラリーマンは萎えぬ剛直ごうちよくを引き抜くと陽炎かげろうツバキをひっくり返した。
そして肉棒でもう一度串刺しにすると背面はいめんえきべん駅弁の体位のまま姿見すがたみの前に立った。

「はあ……♡ はあ……♡ 待って、少しでいいから休ませてくれぬ——お♡♡」

両足をぱっくり開脚させられたまま、第二ラウンドのゴングが鳴る。
サラリーマンのパワフルな腰振りに陽炎かげろうツバキは快樂かいろくお墮ち寸前だ。

「感じ過ぎて全身愛液まみれみてえだな！ こんだけ熱いと湯気ゆげでるんじゃない？
えちえち陽炎かげろうめっ！ ツバキ汁じるだしてイけっ！ オカズを自給自足じきゅうじそくしろっ！」

「い、嫌じゃっ♡ こんな雑な責め言葉でイカされる……なんてっ♡
み、認めっ♡ 妾は絶対にイってなどやらぬっ♡ お♡ お♡」

鏡の中の自分に目が離せないまま、細かくイキまくっている。

男の肉棒でおまんこの中の精液と愛液を掻き混ぜられて雌だと分からせられている。

「このっ！ これで……どうだっ！」

大きく身体を持ち上げた後、最奥まで一気に挿入して子宮口の手前で射精した。子宮口をノックした肉棒からは精液が迸り陽炎ツバキの膣を真っ白に染め上げた。

「んぎっ♡ ｲ、ｲってな……い！ ぐ♡♡♡♡」

最後の意地なのか、上の口では絶頂を否定して唇をきつく閉じたのだが……。

ぷしゅあぁあ♡♡♡

下の口は観念かんねんしたのか中出しに女性器を震わせながら潮を解き放った。
潮は姿見に直撃して鏡の中の陽炎ツバキをびしょ濡れにしただろう。

「ふう……ふう……いったんなら、休憩にしてやってもよかったのに……」

ずるりと肉棒を引き抜くと、どろりと混合液こんごうえきが栓を失って垂れてきた。
本日最高にドスケベな光景だろう。

「ふう♡ ……ふう♡ んひ♡ い、やってないから♡ ……妾に……もっとお♡」

陽炎ツバキは久しぶりのドスケベにハマってしまい、
衣装を陽炎かげろうのように揺らめかせながらサキュバスへと変化を始めていた ……fin♡

【よろこびの声】 在籍No. 453 陽炎ツバキさん

「インターネットのロリババアの妖怪」とかいう
その場のノリだけで書いたリストのひとつコメントを
深掘りして長文にして頂きました。
物書きさんってすごい。

Vの立場ではありますが配信やTwitterでは
設定も立ち回りも何もないただのおじさんなので、
「こうであればよかったな」というVtuber陽炎ツバキの
理想像のひとつがそこにありました。
題材にして頂きありがとうございました！